

○ 研究組織

本調査は、平成17年度厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究」（主任研究者 市川誠一）として実施されました。

本報告書はその研究成果報告のために、財団法人エイズ予防財団平成18年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業・研究成果等普及啓発事業によって作成されました。

日高 庸晴（京都大学大学院医学研究科）

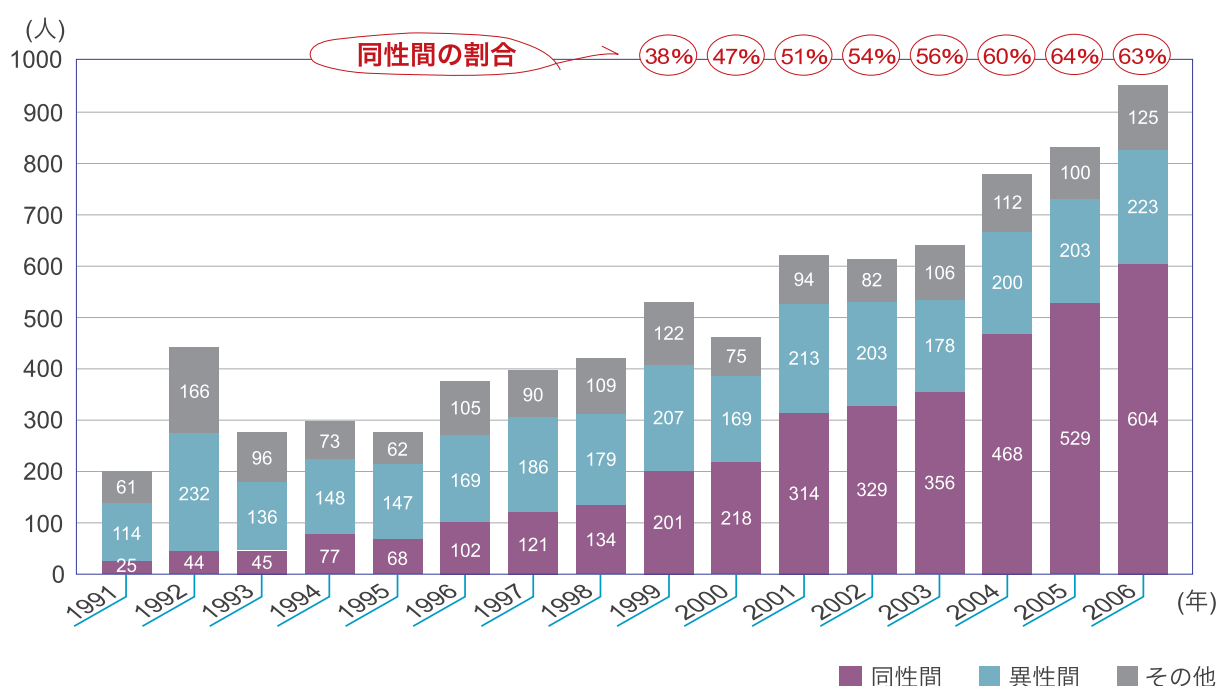
木村 博和（横浜市健康福祉局）

市川 誠一（名古屋市立大学看護学部）

○ 日本のHIV感染の拡大状況

1981年にHIV（エイズウイルス）が発見され、わが国では1985年からHIV感染状況について国が統計をとるようになっていきます。厚生労働省エイズ発生動向委員会によれば、新規HIV感染者の大半が男性同性間の性的接触による感染であると報告されており、2003年では640人のうち356人（56%）、2004年は780人のうち468人（60%）、2005年は832人のうち529人（64%）、そして2006年は952人のうち604人（63%）と年々増加傾向にあります^①。これらの届け出数からみると、わが国では男性同性間におけるHIV感染の拡大が最も深刻であることがわかります。HIV予防対策を実施するにあたって先ず必要なのは、感染が広がっている集団で一体何が起きているのか実態をよく知り、感染リスクのある行動の背景にどういった要因が関連しているのかを明らかにすることです。その上で、実態に即した対策を実施していくことが重要です。

① 厚生労働省エイズ発生動向調査(2006年12月31日現在) HIV感染者の感染経路別内訳の年次推移



○ 医学における同性愛の取り扱い

かつての医学界において同性愛は異常性欲、性的倒錯あるいは性的逸脱であるといった考え方がされており、同性愛は病気であると長い間捉えられていました。しかし米国の同性愛者団体からの激しい抗議を受けて1973年に米国精神医学会は「精神障害の診断と統計の手引Ⅱ（DSM-Ⅱ）」から病理としての同性愛を削除しました。しかし1980年の「精神障害の診断と統計の手引Ⅲ（DSM-Ⅲ）」には自我不親和性同性愛という分類が加えられました。これは同性愛者の多くが自分の性的指向について苦悩・葛藤する状況を捉えて加えられた用語です。さらにその7年後の1987年に発行された「精神障害の診断と統計の手引Ⅲ改訂版（DSM-Ⅲ-R）」からこの用語も削除され、疾病分類としての同性愛は完全になくなりました。1992年に世界保健機関も「国際疾病分類改訂版第10版（ICD-10）」において「同性愛はいかなる意味においても治療の対象とはならない」と宣言を行っています。1980～90年代初頭におけるこうした一連の変化の中で、同性愛は医療の範疇におかれなくなり脱医療化を果たしたと言われていています②。

これによって医学の世界で同性愛はもはや異常として捉えられることは公にはなくなり、「同性愛から異性愛に治す」という治療が必要であるという見解もなくなっています。しかしながらわが国の一般社会の同性愛者に対する実際の反応に視点を移せば現状はどうでしょうか。テレビの「バラエティ番組」や「お笑い」などマスコミで扱われる同性愛者の姿は、ほとんどの場合いまだに嘲笑の対象あるいは「変態」といった異質な存在として描かれています。また、米国では性的指向がゲイあるいはレズビアンであるということだけを理由に殺人事件が起こったり、宗教上の理由から同性愛者を処刑する国も現存しています。こうした状況が起こっているということは、医学における見解が変化すればゲイ・バイセクシュアル男性に対する世の中の差別や偏見も解消されるわけではないということを示しており、これが現状であると言えるでしょう。

② 精神障害のための診断と統計の手引き(DSM) Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders

1973年 ■

米国精神医学会はDSM-Ⅱから「同性愛」を削除

1980年 ■

米国精神医学会はDSM-Ⅲに「自我不親和性同性愛」を追記

1987年 ■

米国精神医学会はDSM-Ⅲ Revisedから「自我不親和性同性愛」も削除

1992年 ■

WHOは国際疾病分類改訂版第10版(ICD-10)の中で、「同性愛はいかなる意味でも治療の対象とはならない」という見解を発表

1994年 ■

厚生省がICDを公式基準として採用

日本ではたった13年前！

1995年 ■

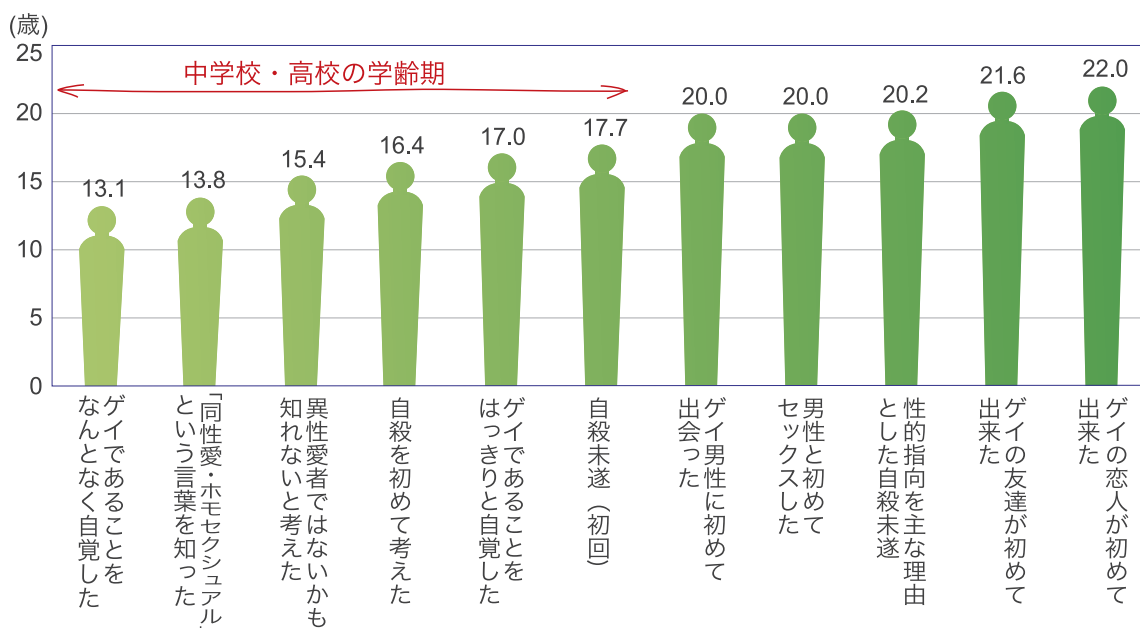
日本精神神経学会がICD-10を尊重する見解を発表

○ 思春期におけるゲイ・バイセクシュアル男性特有のライフイベント

異性愛が自明視される世の中において異性愛者は自分の性的指向について苦悩することはそれほどないものと考えられます。その一方、ゲイ・バイセクシュアル男性は性的指向に関連した葛藤を引き起こすようなライフイベントを中学校・高校の学齢期に集中して経験していることがわかりました。平均年齢13.1歳のときに「ゲイであることをなんとなく自覚した」経験を持ち、13.8歳の時に「同性愛・ホモセクシュアルという言葉を知った」といいます。周囲の友人の多くは異性に性的関心を持つ中で、男性にその感情を向ける自分は一体何者なのであろうか？という思いや戸惑い、違和感を抱くものと考えられます。その戸惑いや違和感の原因を知るために、辞典や辞書、家庭にある医学書など身近な書物を紐解くゲイ・バイセクシュアル男性もいることでしょう。現在の辞典や辞書などに同性愛について差別的記述はほぼなくなってきていますが、1990年代までのわが国の書物の多くに同性愛は「異常」「性的倒錯」という記述がされていました。このことは、わずか14歳に満たない段階で「自分は異常なのかもしれない」という意識を内面化させてしてしまう可能性があると考えられます。こういった出来事を発端に中学校、高校の学齢期に相当する時期にゲイ・バイセクシュアル男性特有のライフイベントを集中して経験しています。後述の通り教育現場でゲイ・バイセクシュアル男性の93%以上は同性愛について不適切な対応をされており、56%~66%は性的指向に関連する言葉によるいじめ被害に遭っています。それと時を同じくして、ゲイ・バイセクシュアル男性特有の多くのライフイベントを経験していることとなります。

これらの経験を経て、20歳になって「ゲイ男性に初めて出会い」、「男性と初めてのセックス」を経て、21.6歳で「ゲイの友達が出来」、「22.0歳で「ゲイの恋人が出来」ということがわかりました^③。このように、ゲイ・バイセクシュアル男性は発達段階として性行動が活発になる年代に至る前に、自らの性的指向に関する葛藤や否定的な体験を重ねてきている、と言えるでしょう。

③ 思春期におけるライフイベント平均年齢 (有効回答数1,025人)



参考文献

Gibson P. Gay male and lesbian youth suicide. In M. Feinleib (Ed), Prevention and intervention in youth suicide (Report to the Secretary's Task Force on Youth Suicide, vol.3), U.S. Department of Health and Human Services.

American Psychiatrist Association. Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Second Edition (DSM-II), 1968

American Psychiatrist Association. Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Third Edition (DSM-III), 1980

American Psychiatrist Association. Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Third Edition Revised (DSM-III-R), 1987

World Health Organization. International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems 10th Edition (ICD-10), 1992

稲葉雅紀, 日本の精神医学は同性愛をどのように扱ってきたか, 社会臨床雑誌2(2)34-42, 1994